

調査報告

乳児保育演習における「保育実践力」育成に関する研究

—小麦粉粘土作品製作を試みて—

工藤 恭子

(2012年12月20日受稿)

抄録： 本研究の目的は、乳児保育演習で実践を試みた「小麦粉粘土作品製作」の「保育実践力育成」に対する有効性を明確にする事である。乳児保育Ⅰを履修している3年生50名を対象に、「乳児の成長発達とその援助」の授業において10グループを作り、グループ毎に「4色の小麦粉粘土」を使用し、作品を製作した。学生は作品製作において「自分自身が楽しむ」という体験を通して1. 指導案作成にあたり考慮すべき点の発見2. こどもの想像力を豊かにするための教材作りの重要性3. 仲間と協力することの楽しさ4. 見立てながら新しい物を作り出す喜び等の気づきがあった。以上の事から「小麦粉粘土作品製作」は「保育実践力育成」に有効である事が示唆された。

Ⅰ. はじめに

筆者は乳児保育Ⅰ・Ⅱを担当しているが、この教科は保育士を目指す学生にとって必修科目であり、本学科においては、3年次で履修する科目である。乳児保育の学習方法は「演習」という形態をとるため、「保育実践力の育成」が求められる。つまり、講義と違って「主体的に考え行動する能力」が求められるのである。

本学科の保育所実習は3年次の5月と9月に実施されるが、学生にとって演習で学んだ内容が実習においても活かされ、新たな課題を明確化する事が重要である。研究で取り上げた「小麦粉粘土の作品製作」は、本科目のシラバス「乳児の成長発達とその援助⑥14～18か月児の粘土での遊び」単元の授業内容であり、7月に実施される。

高橋¹⁾は「小麦粉粘土は、子ども達にとって油粘土や泥粘土などと比べ、やわらかくて扱いやすく、色も楽しめるという特徴があります。感触遊びを十分に満足した後は、ままごとやごっこ遊びを展開して楽しむことでしょう。」と述べている。

保育内容として「小麦粉粘土遊び」を展開するにあたり、まず学生自身が「体験」をすることにより、様々な視点に気づく事が重要であると考え

る。「粘土遊び」の先行研究では、栄野川²⁾の「環境設定の工夫」の視点や、島田³⁾の「幼児の粘土造形活動を関係論的な観点から捉えることの意義と可能性」の視点の研究があるが、いずれも保育者や児を対象とした研究であり、学生に対する授業内容を研究したものが少ないのが現状である。

本研究では、乳児保育演習で実践を試みた「小麦粉粘土作品製作」の「保育実践力育成」に対する有効性を明確にし、今後の課題を考察したいと考える。

Ⅱ. 研究方法

1. 対象者

本学科3年生の「乳児保育Ⅰ」を履修した50名である。

2. 研究期間

平成24年7月である。

3. 研究方法・内容

授業中に学生が作品製作をしている様子(表情)を写真撮影し、言動を記録した。また、毎回授業後に提出する「保育体験レポート」から学生の感想を抽出した。

4. 倫理的配慮

学生に対し、本研究の目的及び研究協力は自由意志である事、結果は個人が特定されないように記載し、研究以外には使用しない事を口頭で説明した。写真撮影に対しても同意を得た。

Ⅲ. 結果

1. 保育園名・クラス名の決定

筆者は、25名ずつの2クラスの授業を受け持っている。各クラス毎に保育園名を決定し、また5人グループを構成し、組名を決定している。これは、ほとんどグループワークで進められる授業であるため、グループメンバーがお互いに団結し、啓発し合えるように導くためである。

行動の主体は学生である。各グループの組には出席簿があり、毎週持ち回りで保育士役を体験し、こども役の学生にシールを貼っていく。

ここに各クラスの保育園名および組名を紹介する。

Aクラス…ゆめぼっぼ保育園

クリームソーダー組、よっつき組、はと組、てちてち組、アラジン組。

Bクラス…にこにこ保育園

えがお組、あかほっぺ組、うふふ組、りんご組、ひよこ組。

2. 乳児保育体験レポート

筆者は毎回演習毎にA4版の用紙に授業内容や学習時の気づき・感想・疑問点等を記入するレポ

ート用紙(乳児保育体験レポート)を配布し、学生に記入させている。現在は学生の意見も反映し、A3版の用紙になっている。本研究の結果に示されているのはこのレポートから抜粋した感想である。

3. 「小麦粉粘土作品製作」の実際

1) 授業準備

小麦粉粘土の作り方及び色の作り方(ピンク・オレンジ色・黄緑色・黄土色・茶色)の資料を準備し、当日配布した。

小麦粉粘土作成の準備(必要物品)

・小麦粉

1人300g×50人分…こどもに準備する場合はこれよりも少なく、出来上がりの時間も考慮し、分量準備が必要。

・水…少量ずつ入れるのがこつである。

500mlのペットボトルの空きボトルに入れて準備(各組に一個)。

・塩…適量混ぜる事により一週間は冷蔵庫で保存し遊ぶ事ができる。適量を瓶に入れ準備。

・植物油…適量混ぜる事により粘土が手に付きにくくなると同時に粘土に艶が出る。瓶に適量準備。

・食紅…赤・青・緑・黄の4色を準備。

食紅は小麦粉粘土をこねる前に添加した方が色が混ざりやすいし、何色も混ぜる事で新たな色合いを楽しむ事ができる。

・発砲スチロールのどんぶり50個

・ピクニックシート各クラス5枚

・学生にはエプロン持参し、動きやすい服装で施行する事を事前に話し、準備させた。

2) 小麦粉粘土作品製作の環境設定

保育演習室において60分間施行。その内訳は、30分間粘土をこね、20分間で作品作り、10分以後片づけと時間配分を行った。

グループの中には経験者も数名おり、中心となって活動する事を依頼した。

演習室はフローリングでできており、そこにシートを敷いて開始した。

演習室内の配置は図1の通りである。

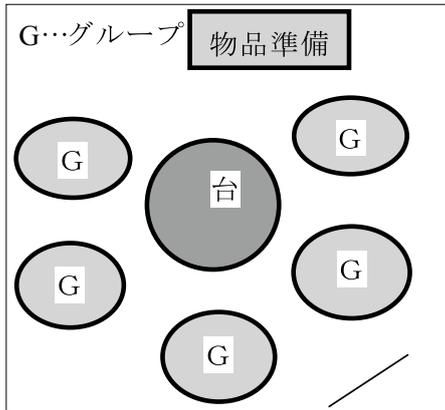


図1 演習室内の配置 入口



写真3 によっき組

3) 小麦粉粘土作品製作時の学生の様子

写真1～5はゆめぼっぼ保育園，写真6～10はにこにこ保育園の様子である。

・ゆめぼっぼ保育園の様子



写真4 アラジン組



写真1 はと組



写真5 てちてち組



写真2 くりーむそーだー組

どの学生もにこにこしながら本当に楽しそうに粘土をこねていた。童心に戻り，こどもの気持ちになって粘土をこねていた。小麦粉に入れる水の量が多すぎてべとべとになり手に付いて困っている者，色を混ぜ合わせ自分達の好きな色を作る事に没頭する者，粘土の感触を楽しみ遊ぶ者等様々な行動の様子が伺えた。

各グループにも特徴があり，おしゃべりを楽し

みながら製作するグループ、静かに一人一人活動するグループ、お互いの作品を褒め合いまね合っているグループ等様々な活動が展開された。

各作品を決定するまでに、グループメンバーでいろいろ意見を出し合いながら行動している姿から徐々に団結力も芽生えてきていた。作品ができからは、お互いの作品を比較し他のグループの作品を褒める姿も見られた。

学生から聞く事ができた言葉は次の通りである。

- ① 耳たぶみたいに柔らかい。
- ② 綺麗な色だね～
- ③ 結構時間がかかるな～
- ④ 上手にできたね。
- ⑤ 手にくっつかないように油を入れるといい。
- ⑥ 何を作ったかわかってくれるかな～
- ⑦ おいしそうに作れたよ。
- ⑧ クラス名を活かした作品にしたいね。

・にこにこ保育園の様子



写真6 えがお組



写真7 ひよこ組



写真8 うふふ組



写真9 あかほっぺ組



写真10 りんご組

小麦粉粘土経験者が2名おり、その学生が中心となり、スムーズに進めていけた。もくもくと小麦粉をこねる学生が多く、集中して行動していた。どのようなテーマで作品を作るかをメンバー同士で話し合い、決めていた。



写真11 うふふ組



写真12 怪獣に見えるかな～



写真13 好きな物を作るぞ～

- ⑥このくらいの硬さでいいかな？
- ⑦上手にできたね。
- ⑧できた～

4. 小麦粉粘土作品製作で学生が感じた事 (保育体験レポートより)

- ① 製作時間が思ったよりかかった。

4色(赤・青・緑・黄)の食紅を使用し粘土をこねていくわけであるが、色づけまでに当初所要時間を30分間と考えていたが、実際にやってみると、時間がオーバーし約40分かかってしまった。その理由を分析すると、小麦粉に水を入れる前に食紅を入れた場合、綺麗に色が馴染みやすいが、小麦粉をこねてから食紅を混ぜるとマーブル状になり、かなり時間がかかる。⇒準備する場合、小麦粉の量は少なめの方が早く仕上がる。また食紅の量はこどもだけでは判断できないと思うので保育者が援助する方が良いのではないかな。

- ② とても楽しい体験であった。

出来上がった粘土は見た事や触れた事はあったが、原材料から初めから作るのは初めてだった。最初粉だった物が水を加える事で粘土の塊に変化していく様子がとても楽しかった。また、水の量によりうまくまとまらなかったり、難しさを感じた。使用した油や塩の意味(油は小麦粉粘土がこびりつかないようにしたり、粘土に艶をだすため、塩は保存のために必要)を知らなかったが、実践してみても必要性を感じる事ができた。

- ③ 何歳児に実践できるか考えた。

今回は14～18か月のこどもを想定して実践したが、この年齢で小麦粉をこねるのは難しいかもしれないが、ある程度できた状態でこねる体験をさせれば体験できるのではないかと感じた。全部初めから体験させるなら3歳児からが良いのではと感じた。障がい児に対しても実習時に「小麦粉粘土製作」をやっていたのを見た事があり、握力が弱くても小麦粉粘土なら柔らかいのでこねて遊ぶ事はできると思う。小麦粉粘土をどの年齢にどのように製作させ体験させるかは、その年齢やそ

学生から聞く事ができた言葉は次の通りである。

- ① 楽しいね～
- ② 綺麗な色にしたいね～
- ③ 怪獣に見えるかな～
- ④ 水の分量って難しいよ。
- ⑤ 結構時間かかるね。

の子の成長・発達を良く考えて決定すべきであると感じた。

④ 仲間と一緒にできて楽しかった。

どのようなテーマで作品を作るかを仲間で話し合うのが楽しかった。仲間の作品を見て感動した。本物そっくりの作品を作る事ができ協力できた。

⑤ 指導案での考慮点を考えさせられた。

何歳に指導するかによって指導案は変わってくる。準備の段階でも細かくなければならぬし、保育者は具体的に何を援助するのか、どのようなねらいでどのような言葉がけをしながら援助するのか、時間配分もしっかり計画し、後片づけの時間も十分に取らなければならない。

⑥ 小麦粉粘土の感触を楽しんだ。

小麦粉粘土は柔らかく（耳たぶの硬さ）、とても感触が良く、嫌な臭いもしないし、こどもにも安全であるため、今度の実習では是非活用してみたいと思う。

⑦ 環境設定について考えた。

今回演習室を使用し、シートを引いて自由に行動し、開放感があった。こねるのにも力が入れやすかった。汚れても良いという気持ちが安心感につながった。全体を通して、全員が書かれていた事項は、「楽しかった」という言葉であった。

5. 出来上がった作品

にこにこ保育園の作品（写真14～18）

テーマはそれぞれが個性的に決められており、野菜・果物・ピザ・スパゲティー・きのこ・動物等が描かれていた。また、色彩にも特徴があり、暖色系でまとめているもの、寒色系でまとめられているもの等様々であった。



写真14 りんご組



写真15 うふふ組



写真16 えがお組



写真17 あかほっぺ組



写真18 ひよこ組



写真21 てちてち組

ゆめぼっぼ保育園の作品 (写真19～23)

テーマは決められている組と、特に決めずに好きなものを並べて描いた組もあった。

お菓子・動物・花・果物・中華饅頭・ラーメン・野菜・キャラクター・人間の顔・餃子等が描かれており、全体の色彩は明るい原色に近い色を使用していた組が多かった。



写真22 アラジン組



写真19 はと組



写真23 によつき組



写真20 くりーむそーだー組

IV. 考 察

この授業において教員は次のような4点の学生の到達目標を設定した。

1. 学生が小麦粉粘土作品製作を心から楽しむ事ができる。
2. 指導案立案のための考慮点に気づく事ができる。
3. 保育実践のための配慮点に気づく事ができる。
4. グループメンバーの相互理解ができる。

山田⁴⁾は、「保育実践力」を「指導計画を作成する力・保育を展開する力・保育実践を省察し今後の課題をもつ力」の3つの力であると定義している。そこで、教員が設定した到達目標の達成度を評価しながら、「小麦粉粘土作品製作」の「保育実践力育成」に対する有効性を考察していきたい。

1. 到達目標1の達成度

学生は撮影した写真の表情や「保育体験レポート」の感想にも表現されている通り、小麦粉粘土作品製作を楽しんでいた。そこには教員の「環境構成」に関する意図があった。机と椅子という限局された環境ではなく、保育演習室というフローリングの部屋で自由な姿勢で身体全体を使用して活動できるように設定した結果、心理的にも心の開放感につながっていったと考えられる。

研他⁵⁾の研究では、「保育のねらい・実践記録」[評価]の中で「楽しむ」という表現が記載されている。学生は教員の意図以上に「自然発生的」に「楽しむ」という行為を行っていたように考えられる。保育を展開するにあたり、効果的な環境設定を行う事によって「楽しむ」という事を実感できる事を学生も感じていたようである。以上の事から、この目標は達成されたと考えて良いと考える。

2. 到達目標2の達成度

生後14～18か月の児にとって、手の運動機能の発達からみると、田中⁶⁾は、「粘土も、たたいたり、ちぎったりして遊ぶことができるようになる。」と述べており、中西⁷⁾は、大切にしたい遊び—手を使っての遊び—において、「手を使っての遊

びは、子どもが、砂、土、泥、水、小麦粉、片栗粉などの感触を楽しみ、押すと形が変わることを発見して喜ぶ。これらの素材に触れることによって、形がどのようにでも変化し、可塑性があるので、物を操作し、つくり出す手指の育ちを豊かにする。」と述べている。このような年齢における「小麦粉粘土作品製作」による達成課題を意識し、学生は指導案を立案しなければならない。そこで学生のレポートの感想から考慮点として重要な視点をまとめてみたい。

1) 小麦粉の量の確認の必要性

研他⁵⁾の研究では、「2kg（幼児一人約15g）の小麦粉粘土」を作成していた。学生は一人300gの小麦粉で作成したが、量が多すぎてこねるのに当初予定していた時間を10分間もオーバーし、その後の作業進行に影響を与えてしまった。大人でもこのようなアクシデントがあるとすれば、初めから量を少なめに設定する必要がある事がわかった。

年齢設定によってどのくらいの操作が可能であるかを予測しながら、どの部分で関わりが必要であるかを指導計画に提示する必要がある。

つまり、保育者が事前に小麦粉粘土を作成してしまうのか、児の前でやって見せるか、あるいは児が直接作成するのかを決定しなければならない。

2) 小麦粉の色付けの体験の必要性

当初は赤・黄・緑・青の4色を用意した。学生は原色をそのまま楽しむ事の喜びを味わうだけでなく、最初に色の出し方の資料を準備した事で欲しい色を試し、そのうちに自分達で食紅の量を加減する事で好みの色彩を自由に作り出していた。実際に体験する事により、こども達が体験できるであろう色への関心を広げる事ができ、その事によってこどもの想像力を豊かにする事もできると考える。展開では、色と色を混ぜる事で新たな色彩を作り出す楽しみを実際にこどもの前で見せる事により、創作への関心を引き出す事にもつながると考える。

3) 小麦粉の硬さの体験の必要性

学生は「耳たぶくらの柔らかさ」を目安に粘土をこねていくわけであるが、自分でなかなか判断できない時、自然と仲間に相談する姿があった。14～18か月の児においては他人との比較は無理だとしても、自分の身体との比較は感触として体験する事ができると考える。例えば「お耳さわってみて、同じだね、柔らかいね」等と、粘土遊びを通して自分の身体に気づくという学習もなされていくであろう。

3. 到達目標3の達成度

1) グループ構成を考える必要性

グループを意図的に組む事により、様々な効果を期待できる。例えば、他の子ができない部分を手伝う、お友達の良さを認める、自分だけで解決できない問題を仲間と解決しようとする、譲りあって物を使う等である。学生は実体験で得られた効果を指導案のねらいとして設定する事もできる。この効果をねらえるのは、2歳以降かと考える。学生の感想の中にも仲間と感情を共有できる利点が述べられていた。

2) 見立てながら作品を製作する必要性

高橋¹⁾は「感触遊びを十分に満足した後は、ままごとやごっこ遊びを展開して楽しむ事でしょう。」と述べているとおり、14～18か月のこどもにとっては小麦粉粘土の感触を楽しむ事はごっこ遊びやままごと遊びのきっかけ作りとなるであろうから、十分な関連するおもちゃの準備やこどもへの「言葉がけ」の設定が必要になると考える。

学生は、グループで決定した場合はそのテーマに添って自分の好きな作品を製作し、テーマが決められていないグループは自由な発想で作品を製作していった。どちらにしても学生は「やらされている」という感情ではなく、「主体的に行動している」という感情を体験する事ができた。しかし、関わる年齢によっては、意図的にテーマを設定した方が良いのか、こどもの主体性にまかせた方が良いのかは、保育者の判断にまかされる部分

がある。いずれにしても、実践し評価をしながら次回に活かしていく事は重要である。

また、見立てたい物が上手に製作できない場合は、色の選択や、形を作る時にどの程度関わるかによって保育の質が変わってくるはずである。

4. 到達目標4の達成度

学生はグループを構成する事で、仲間意識が向上し、また、他のグループのメンバーとも交流し作品の良さを認め合ったりしていた。その内容は作品のテーマであったり、色彩への感動であったり、活動への熱心さであったり、作品製作の器用さ等であった。このように相互理解を深める事で、仲間と協力する事の楽しさを感じ、こども達の社会性が育っていくものと考えている。

14～18か月の児にとっては、まだ仲間意識が芽生える時期ではないが、保育者から「ほめられる」「認められる」という体験がのちの「自己肯定感」につながり、良い意味での「競争心」を体験する事で社会性を身につけていけると考える。

以上の様に、学生は「小麦粉粘土作品製作」を体験する事で様々な学びがあったが、この学びにより次の4点の気づきがあった。

1. 指導案作成にあたり考慮すべき点の発見
2. こどもの想像性を豊かにするための教材作りの重要性
3. 仲間と協力する事の楽しさ
4. 見立てながら新しい物を作り出す喜び

これらの気づきは、いずれも「保育実践力」に結びつく体験であり、乳児保育Iの授業における「小麦粉粘土作品製作」は、「保育実践力育成」に有効であると考えている。

5. 本研究の限界および今後の課題

研他⁵⁾の研究では、「幼児たちは、小麦粉粘土の感触や粘る特徴を学ぶことで、将来のパンやケーキ作りの基本的材料やその作り方、そして蛋白質のグルテンの特性を学ぶための基本的な学習を遊びを通して学んだと言って良い。」と述べて

おり、現在のこどもに対する保育だけでなく、今後のこどもの発達にどう影響を与えていくのかという長期的見通しを持ちながら「乳児保育演習」を企画していかなければならない。今回の授業では前もって学生に意識づけを行わずに授業を展開した。しかし、来年度に向けては、「小麦粉粘土作品製作」の保育にとっての意味を学生に浸透させた上で授業展開していけるよう配慮していきたい。その事により、学生の「保育実践力」を高いレベルで育成する事ができ、しいては保育の質を高める事にもつながると考える。

V. まとめ

「保育実践力育成」に対する有効性を明確にする事を目的に、「小麦粉粘土作品製作」を行った。

学生は「自分自身が楽しむ」という体験を通して次の4点の気づきがあった。

1. 指導案作成にあたり考慮すべき点の発見
2. こどもの想像性を豊かにするための教材作りの重要性
3. 仲間と協力する事の楽しさ
4. 見立てながら新しい物を作り出す喜び

以上の気づきは「保育実践力育成」に有効である事が示唆された。

今後の授業においても、教員の学生に対する到達目標を明確にし、特に「保育実践力育成」を意識し展開すべき授業である事を忘れず、授業計画の内容を充実させていきたいと考える。

文 献

- 1) 高橋かほる：新版遊びの指導乳・幼児編. 165, 東京, 同文書院, 2009.
- 2) 栄野川公恵：温かな人間関係を育むための援助の工夫—思いを伝え合う生活を通して—, 那覇市立教育研究所研究報告書：1-12, 2006.
- 3) 島田佳枝：幼児の粘土造形の研究方法をめ

ぐって—関係論的観点の意義と可能性について—. 埼玉学園大学紀要, 11：235-242, 2011.

- 4) 山田秀江：幼稚園教育実習における保育実践力の学びに関する一考察—責任実習の実践報告から—. 四条畷学園短期大学紀要, 45：53, 2012.
- 5) 研政一, 祐成かおり, 伊藤伊代, 井上阿沙美：幼小連携に寄与する保育教材の開発と実践の検討 (1) —小麦粉粘土教材の効果について—. 羽陽学園短期大学紀要, 9 (1)：17-25, 2011.
- 6) 田中昌子：実践・乳児保育子どもたちの健やかな未来のために. 65, 東京, 同文書院, 2008.
- 7) 中西京子：新時代の保育双書乳児保育. 139, 岐阜県, みらい, 2010.

Cultivation of 'Practical Nursing Skills' in Infant Nursing Exercises

KUDO Kyoko

Abstract: This study clarifies the effectiveness of 'creating flour-clay artwork', attempted in infant nursing exercises, with regards to the 'cultivation of practical nursing skills'. The participants were 50 third-year students majoring in Infant Nursing I, enrolled in a 'Growth development of infants and its support' class. The 50 participants were divided into ten groups, and each group created a piece of artwork utilizing 'flour-clay in four colours'. The participants discovered the following through the enjoyable experience of personally creating the artwork: 1) the points to be considered in producing a teaching plan; 2) the importance of creating teaching materials that enrich the imagination skills of children; 3) pleasure in collaborating with their colleagues; and 4) the joy of creating something new while evaluating it. The results suggested that creating flour-clay artwork is effective in cultivating practical nursing skills.

